論文審査結果の要旨

論文提出者	（氏名）	原　田　真　澄	
論文審査委員	主　査	内　藤　　徹	印
	副　査	山　野　貴　史	印
	副　査	大　星　博　明	印
論　文　題　目	回復期リハビリテーション病棟における脳卒中患者の摂食嚥下障害の重症度と口腔環境との関連性		

（論文審査結果の要旨）

脳卒中患者においては急性期には摂食嚥下障害が頻発し、回復期においてもしばしば障害が残存することが知られている。摂食嚥下障害は低栄養やサルコペニアを生じ、ひいては社会復帰の遅滞につながることが大きな問題とされている。本論文は、回復期リハビリテーションに入院した脳卒中患者 299 名を対象として行った 4 年間にわたる調査について検討を行い、摂食嚥下障害の重症度に関連する因子の探索を行ったものである。調査対象の重症度は、22%のものが 3 食ともに嚥下食を経口摂取しているという Food Intake Level Scale（FILS）で 7 度を満たさない重症の摂食嚥下障害を有するものであった。

FILS 7 度未満の重度の摂食嚥下障害の生じる因子を多重ロジスティック解析分析により探索したところ、ADL の評価である Functional Independence Measure（FIM）のオッズ比が 9.8（95%信頼区間 4.2～23.1）と高値であったこと、口腔の評価尺度である Oral Health Assessment Tool（OHAT）のオッズ比も 5.2（95%信頼区間 2.2～11.9）と強い関与が認められた。OHAT の下位項目について分析を行うと、口唇のオッズ比が 7.8（95%信頼区間 3.8～16.3）、舌が 5.8（95%信頼区間 2.9～11.6）と、口腔関連器官の中では口唇と舌の状態が摂食嚥下機能に強い影響を及ぼしている可能性が示唆されている。

公開予備審査会とその後の追加レポートにおいて、研究の背景、手法、結果、考察について明確な説明と質疑に対する適切な回答が得られ、本論文に関する充分な背景と知識をもち、研究成果への貢献を有すると評価できた。

以上より、本論文を博士（歯学）の学位申請論文として適格で価値のあるものと評価し、予備審査を合格と判定した。